

# 『それでも私は時間をかけたい』

(紀の川市最優秀賞受賞)

貴志川中学校 3年 谷口 音羽

「手紙はもう書けないんだ」

私はそう思ってしまいました。小学校6年生の私はサポート教室という苦手な分野のある人がいく教室に通っていました。先生は優しく、何回も質問しても、ゆっくりと教えてくれました。その教室には黒板があり、私はよくそこで絵を描きました。以前から私はそのキャラクターが好きだと先生によく言っていました。そしていつも通り教室に行くと、先生から、「音羽ちゃんがよく好きって言ってるキャラクターのことを知っている子がいるのだけど話してみない」と言われました。早速、私は手紙を書くことにしました。その日から私は手紙の返事を待つことが毎日の楽しみになりました。手紙の内容は、最近していること、ハマったアニメ、ペットの話など、些細な話でも返事が楽しみになりました。それから手紙でのやり取りは続きました。その手紙にも終わりは来ました。手紙の相手と実際に会う機会がありました。そして連絡先を交換しました。私はその時いつでも会話できる喜びと同時に、もう手紙は書けなくなったんだとさびしさを感じました。今はLINEがあっていつでもどこでも話せますし、画像、動画なども送れます。だから手紙という手間がかかるものは忘れられてしまうのです。それでも、手間がかかっても手紙は私の大切な宝物だったのです。私はその手間に面倒臭さは感じませんでした。文字を書く手間、手紙を封筒に入れる手間、手紙に飾りつけをしたり絵を描いたりする手間、それらは全て私のかけがえのない時間でした。

チャットは一瞬でメッセージが届き、手紙は時間がかかり、スマホでは様々な音楽が聴けて、CDプレーヤーでは限られた音楽しか聴けなくて、CDも出し入れしないといけない。でも私は時間をあえてかけることは無駄ではないと思っています。インスタントのコーヒーより手間をかけて挽いたコーヒーが美味しいように、時間をかけると何か「特別」になるのです。

私はタイパ、タイム・パフォーマンスに固執しすぎてしまう今の世の中に、「あえて時間をかけること」を提案したいです。私の好きな曲の歌詞にこんな一節があります。

「こんな時代じゃあ手間暇掛けようが掛けなかりょうが終いには一緒くた、きっと違いの分かる人は居ます、そう信じて丁寧に拵えて居ましょう」

この歌詞は、何でも簡単にできる時代になって、どうしても手間を掛けてもかけないでも多くの人にその違いは分からないけれど、きっとその「違い」に気づ

く人がいるんだと伝えているのだと思います。手間をかけることは面倒な一面も確かにあるかもしれませんが、心を感じる分野において手間をかけるということは丁寧なことの証ではないでしょうか。誰かを思って時間を掛ける、これは無意味ではない、必ず意味があると思うのです。

私は手紙で会話をしている時に、手紙の楽しさと、時間をかける大切さを学びました。私はこの時代の中であえて、手書きで手紙を書き、CDのジャケットの裏に書かれている歌詞を味わいながらCDプレーヤーで音楽を聴いて、コーヒーの豆を挽き、既製品ではなく、1から心の込めた物をつくりたいのです。人は効率を求める余り、それまでの誰かのことを思う工程に見向きもしなくなってしまったような気がしてなりません。それがたまらなく悔しいです。誰かを思って自分のために、何かをする時間、それは幸せな時間ではないでしょうか。

私は何度も訴えていきたいです。手間をかけなくても良い時代の中で、それでも私は時間をかけたいと。

